

閩の美に映る福建—長崎交流史

武蔵野美術大学教授・廖赤陽

2020年12月22日から25日、東京・中国文化センターで「閩の美—中国福建古代美術並びに文化観光展」が開催された。これは、2021年という福建文化年の正式の幕上げでもある。「閩」というクニについて、司馬遼太郎は、その『街道をゆく、中国・閩のみち』の中に次のように書いた、

「福建省は、上代以来の呼称で閩^{びん}という。面積は小さくなく、日本列島の本州の三分ノ二にちかい。人口は、ヨーロッパでいえばオランダほどはあるのではないか。閩は、中国大陸の東南部を構成しつつも、存外大陸的な要素が少なく、自然地理はむしろ日本、特に西日本に似ている。山が多く、耕地はすくない。福建省を特徴づけるのは海岸線のながさで、しかも良港に富むリアス式海岸線と形づくっている。このことは内陸型の中国において、むしろ希少ともいべき海洋民族を育て上げるのに役立った」。

本文は、今回展示した閩の美を読者とともに鑑賞しながら、黄檗文化を含めて、長崎—福建の長い交流の歴史を回顧しその持つ意味を吟味したいと考えている。

福建—日本の交流の歴史は長い。少なくとも、12世紀から、福建人はすでに頻繁に九州辺りに来航した。日本の平安朝の史料『朝野群載』には、「大宋国泉州人李充也…参来貴朝」という記録が残されている。同史料は、泉州の商人李充が自らの商船に乗って、12世紀初めころ、三回も北九州辺りに来航して貿易を行っているという詳細な記録である。12世紀以来、泉州はすでに台頭海外貿易で栄えた。マルコポーロは、泉州のことをザイトン（刺桐）という名で記録し、東方第一大港と称した。泉州から出航した中国ジャンク（帆船）は海のシルクロードを開き、福建—日本関係を一層密接させた。泉州、福州などの港から九州辺りに来航した唐船は多くの銅銭と磁器を運び、同時に移民と融合を促した。



泉州海外交通史博物館に陳列された宋代の古船。これは遠洋貿易船である。浸水防止のために安全装置として水密隔壁によって仕切られた防水隔室がはっきり見える。

元を経て、明清時代に入ると、福建―日本関係は一つの全盛期を迎えた。17世紀前半、東・東南アジアの海上の運航と貿易を制したのは、主に中国東南部出身の海上商人集団＝海商グループである。そのリーダーの一人が鄭芝龍という人物があり、鄭芝龍は平戸藩士の娘田川マツを娶って、福建―日本混血児である鄭成功が二人の子として平戸で生まれた。鄭成功は国姓爺の名を馳せて時代の風雲児として歴史に濃厚な一筆を書き残し、中国の民族的な英雄と評価された。



平戸の鄭成功記念施設にある田川神位。鄭成功は明王朝の王位を有するために、その母は「太妃」という称号を持つ。



鄭成功の原籍地・福建省南安の鄭成功廟に祭られた鄭成功の母田川の像

閩日関係がピークに達したのは、やはり17世紀30年代以降、長崎は対外貿易港に指定された唐船貿易の時代である。唐船貿易の全盛期には、毎年70隻もの唐船が入港した。そのうち、福州、厦門、泉州、漳州などの福建諸港からの船は多くある。唐船は陶磁、書籍と日用雑貨を日本に運び、帰航は日本の銅と俵物などを持ち帰った。唐人貿易の通訳と仲介を担ったのは、帰化中国人とその子孫が務める唐通事であり、これらの唐通事の大半も福建出身者であった。



慶賀筆唐館之巻の一。入港したのは福建船であり、
貨物は浮船に卸されて唐人屋敷に運ばれた様子が描かれている

来航の船主は興福寺（南京寺）、福濟寺（泉州寺・漳州寺）、崇福寺（福州寺）という三つの寺を作った。これは、長崎の有名な唐三ヶ寺であった。このうちの二軒も福建人が作ったもので、長崎貿易における福建商人の重要性がうかがえる。これらの唐寺は中国から唐僧を招き住職を務める。その文脈で、1654年、隠元禅師は数十人もの弟子を連れて来航し、のちに上洛して京都で黄檗山万福寺を開山した。後水尾法皇、幕府要人、各大名らは競って隠元に帰依し、「大光普照国師」号という特諡が賜れた。隠元一派はのちに黄檗宗という日本仏教の一大宗派までに発展し、黄檗文化は、江戸期の日本に仏教のみならず、書道、絵画、建築、飲食、茶道などにも大きな影響を与えた。



黄檗宗の大本山——京都宇治の黄檗山万福寺山門



万福寺に建てられた「特賜大光普照国師塔」石碑

渡来唐人の増加に従って、幕府は1688年に唐人居留地として唐人屋敷（唐館）を建設した。唐館は華僑文化の伝播と保存のセンターにもなり、唐人たちは館内で土神堂、天后堂、観音堂、仙人堂などの信仰施設を作り、さらに、舞台を築き音楽戯劇を上演した。そのうち、唐館から伝わった蛇舞（龍踊）、彩舟流し、清明祭、明清楽、菩薩揚げ、媽祖盛会、関帝祭、

盂蘭盆会、冬至などの習俗は、今日に至って長崎に残り、地域の重要なアイデンティティと文化・観光資源になっている。



慶賀筆唐館之巻の七、唐館内部での龍踊りの様子が描かれている。この緑色の龍は、今日の長崎くんちに行われた龍踊りの原型である。

このプロセスから見ると、福建—日本交流史において、貿易ネットワークと文化ネットワークは重なった形で展開され互いに促すものであることがわかる。今回の展示品を通して、我々は、上述の歴史物語りに直感的な認知を得ることができる。延べ31件の展示品あるが、その時代は、宋、元、明、清にわたり、日宋貿易から長崎貿易に至る歴史の持続とその変容を現した。これは、一つの文化、二つの海の道と称することもできる。一つの文化は、黄檗文化であり、二つのみちは、陶磁のみちと文墨のみちである。



黄檗文化。左上：黄檗三筆の一人、即非の書法扁額「喫茶」。右下：黄檗煎茶道具一式。



海のシルクロード＝陶磁のみち
徳化窯文殊菩薩像。明代、「磁聖」何朝宗の作品。表面に施越された白釉の潤い象牙色や飄逸な衣服のライン、さらに獅子と会話するような慈悲深い面さしが菩薩の心象風景を生き生きとしてあらわしている。



文墨のみち

田黄荔枝凍瑞獅紐ズ橢円形印章。清・楊玉旋作。田黄石は石印の王とも呼ばれる。この玉旋款の印章は高潔かつ温雅の佇まいで、赤身を帯びた濃い橘皮黄の決め細やかな肌には蘿蔔紋（大根の切り口のような紋）が走る。鬣をなびかせながら背筋を伸ばして天を睨む獅子の姿は生氣に満ちて愛らしい。

海のシルクロードの実態は陶磁のみちであり、文墨のみちは、印章、扁額、南画、書道、扁額、舶来書籍とともに漢字文化圏をつなぐ重要な道であった。

福建—日本経済文化交流の影響は、日中関係にとどまらず、遠くの欧州までに及んだ。今回の展示品のうちに、何点もの呉須赤絵があったが、これは、日本に大量輸入された漳州窑の出品で、呉州赤絵または呉洲赤絵とも呼ばれる。呉須はヨーロッパにも広く好かれて、オランダの東インド会社は17世紀初頭から大量輸入し始めた。ヨーロッパに輸入された中国磁器は、クラーク・ポセレイン（Kraak porcelain）とも呼ばれて、日本人はこれを芙蓉手と訳している。



明代・漳窯紅緑彩立鳳花門卉紋大盤

呉須赤絵の一点。その絵付けは、主として緑と朱を用いて自由闊達に描いている。荒々しいまでの付け立て風な描法は、のびのびとして、場合には野放図のような風格が現れ、江戸全期を通して愛好者の層を広めた。



明代・漳州平和窯クラーク青花大盤

唐船貿易は、九州北部の日本陶磁器の発展を促進した。1641年に来航した一隻の福州船は、小皿2万2千個、茶わん5000個を乗せたが、10年後の1654年の唐船輸入品のうち、陶磁器の大量輸入が見られず、その代わりに大量の陶器絵具が輸入された。このような、既製品から原材料へと貿易構造の変化の背後には、日本の有田焼の成長であった。

17世紀中期の明清交替期の混乱、並びにその後の遷海令などの影響で中国の磁器輸出が妨げられた際、有田焼の海外輸出のチャンスが訪れてきた。その輸出港の伊万里の名で欧州に大量輸出された。初期のデザインは中国磁器の模倣やヨーロッパ人の好みとオーダーに応じて作られたものもあるが、やがて独自の風格を確立し、乳白の地肌に赤い染付で仕上げた柿右衛門様式と金彩を塗り絢爛華麗な錦染めの伊万里様式が生まれた。これらの有田焼はヨーロッパでイマリ様式という名で広く歓迎された故に、展海令が実施された17世紀末、中国磁器が再びヨーロッパに輸出された時に、イマリ様式をまねした。これらの中国磁器は「チャイニーズ・イマリ」と呼ばれた。今度は、日本の磁器は逆に中国に影響を与えた。

なお、今回の展示品のうち、三件の南宋の黒釉窑変茶盞がある。日本人はこの予期せずに現れた窑変に夢と幻想に満ちた名前を付けた「曜変天目」。まさに雄大かつ幽玄な宇宙に煌めく満天の星のように、福建と長崎交流の悠久な歴史を映し出すのみならずその可能性に満ちる未来も秘められていると思われる。



南宋・建窯兔毫茶盞

中国では兔の毛のように見えることから「兔毫」といい、日本では穂の細かい毛に見立てて「禾目天目」と呼ぶ。

